

SMツアー：貴女の妄想叶えます
第4話：プライベート・リョナファイト



濠門長恭

目次

0. 派遣 - 3 -

1. 視察 - 6 -

2. 体験

3. 娼談

4. 私闘

5. 転職

後書

0. 派遣

高山昭雄が大手の旅行会社を辞めて独立したのは、三年前だった。有限会社の形をとってはいるが、実際には個人経営であり、独自のツアー企画による売り上げは少なく、元の会社の下請け業務が主な収入源だった。格安をうたい文句にするツアーの下請けだから、利益はゼロに等しい。二十年も業界にいて内情を知りつくしながら、それでも割に合わない起業に踏み切ったのは、彼の一種倒錯したフェミニズムによるところが大きい。

高山は若い頃、ツアーコンダクターをつとめていた時期があった。旅の恥は掻き捨てだが、インターネットがそれほど普及していなかった当時、ツアー参加者は恥の捨て場所を知らない。とうぜん、高山は夜も観光案内にいそしむことになる。ナイトクラブや公認の売春館ですめばまだしも、東南アジアや東欧へのツアーともなると、少女買春の斡旋までさせられた。不法な要求を毅然と断わるどころか、共同正犯になったのだから——彼の倫理観や遵法意識も底は見えている。

その手の観光客には好評だった彼にも、苦手な相手がいた。ごく一部のマニアックな女性である。娼婦の真似事がしたい、SM館で本格プレイをしたい。それくらいならツテはある。しかし。

「麻薬所持で逮捕されても、肉体の賄賂で釈放されるってほんと？」

「ポニーガールの牧場が、この近くにあるとネットで見たのですけれど？」

「淫らな女は公開鞭打ちですって？」

「女子割礼って、成人でも受けられるの？」

合意、あるいはフィクショナルな関係におけるマゾプレイではなく、現実世界での被虐を体験したいという女性たちだった。実際にハードなSMプレイをしている女性もいたし、妄想逞しい処女もいた。後者は自分の妄想が現実となったとき、おそらくその場では後悔するだろう。しかし、日が経つにつれて、当時を思い出しながらオナニーに耽るのではな

いか。高山は、そう考えた。

現実世界での被虐を安全に体験させるには、相応の事前準備が必要だった。ポニー牧場を例にとれば、まずオーナーとの信頼関係を築かなければならない。撮影の諾否についても、参加者と牧場側とで取り決めておく必要がある。高山が話をつけた牧場は裕福なサディストたちの共同経営だったが、ポルノの販売や男性訪問者からの高額な〈寄付〉で運営費の過半をまかなっていた。

事前準備の手間は一般ツアーとの比ではない。現地スタッフに丸投げもできないし、官憲に賄賂が必要な場合もある。赤字すれすれの弱小旅行社が手がけられる仕事ではなかった。それでも高山が専属の裏社員を雇ってまで『スプレディッド・マーベラス・ツアー 有限会社』を起こしたのは、特殊な願望を秘めた女性への奉仕であると同時に……ツアーコンダクターからの詳細な（たいていは写真が添付された）報告書、自分ひとりではとても体験しきれない数々のシチュエーションを堪能するためだった。

三つの国内企画を裏ページで公表したのが、二年前。七回の催行で参加者は延べ二十三人。試験的に始めた海外の企画（性務所）や、オーダーメイドのツアー（ドンキーガール）を含めても、三十人がやっと。たったこれだけの需要のために二人の専属スタッフを抱えているのだから、大赤字もいいところ。

とはいえ、あまり大っぴらに宣伝もできない。それどころか。表ページの隅っこに成人女性限定のアンケートを設置して、プライバシーに係わる質問も含めて、百以上の項目に答えさせ、その結果をA Iに分析させて、合格者だけ裏ページに辿り着けるようにしてあるくらいだ。

高山はSOSを維持するために、父が遺してくれた貸しビルの収益をすべて注ぎ込んでいる。つまりは道楽、それともおのれの性癖を満たす代償行為なのだった。

その高山からもっとも恩恵を受けているのは西川麻凜と村上詩織、二人の裏社員だった。彼女たちも、SOSに参加する女たちと同様、いやいっそう業の深いマゾ牝だった。ツアー

コンとして参加者と同じ性的虐待を体験して、それで給料をもらえるのだから——すこしくらい、自分の願望とは異なる被虐でも文句は言えない。

しかし実際のところ。麻凜は野外露出やレイプとか強制売春に憧れ、詩織は苦痛系が好みだから、棲み分けができています。

二人にとってのいちばんの不満は、催行回数の少なさだった。この二年間で、麻凜がSOSにたずさわったのは三回で、詩織が四回。麻凜は裏社員として働くよりは、SMツアー社の正社員として社内業務に就いている時間のほうが長かった。

詩織はこの三月下旬から六月中旬にかけて、東南アジアで凄絶な女囚性務所を体験して、しばらくはその余韻に浸っていたところだったが、八月になると、新企画の現地調査を命じられた。麻凜に代わってほしいくらいだが、彼女には適していない内容だった。

とはいえ、詩織もいやいや業務命令に従ったわけではない。新企画は、詩織がずっと憧れてきたシチュエーションだったのだ。

村上詩織は新たな被虐に胸を躍らせながら、渡米した。ローカル空路を乗り継いで、最後は興行主から差し回されたヘリで、小さな都市へと運ばれた。

ヘリは、VIP待遇というわけではない。むしろ逆だった。わずか三年前に起業した東洋の島国の小規模な旅行代理店。そこから、非合法のリョナファイトに出場者（というより犠牲者）を送り込みたいなどと申し込まれて、すんなり話を受け容れたりしては、百年の長きにわたって組織を維持できてきたはずもない。とはいえ、常に新しい生贄を求めているのも事実だった。興行そのものは非合法だが、人集めまで非合法な手段に頼ってはいは、やはり破綻が訪れる。

組織は独自の調査で、SMツアー社が高山の開示情報どおりに裏オプションを手掛けていることも確認して、詩織の現地視察を受け入れることにしたのだった。

ヘリでの送迎は、詩織から自由な移動手段を奪うのが目的だった。

それは高山に教えられていたが、詩織は気を悪くしたりはしなかった。組織の指示に従っていれば、安心して被虐を堪能できる——そう思うことにした。

1. 視察

アリーナの壁に沿って組まれた鉄骨の上に並ぶ十二のVIPルーム。それよりもひとまわり小さな箱がマネージャーボックスだった。それでも、三人がゆったり座れる広さはあった。

村上詩織は興行主のドン・ガストーニと並んで、八分の入りの観客席を見下ろしていた。

リングを取り巻く二段のS席は四千ドル。その他のA席は二千ドル。これを高いと思うような客は、ここにはいない。VIPルームは一万ドルだが、大相撲の升席に比べて『すこし高い』程度だと、詩織は自分の経済感覚を修正した。

S席は三方をパーティションで囲まれていて、両サイドに補助椅子を置ける広さがあるし、A席もワゴンを押したバニーガールが前後左右に通り抜けられるだけの間隔が設けられている。だから、日本の基準としてはじゅうぶんに広い体育館に設けられた席は、全部で六百に過ぎない。それでも、満席なら入場料だけで百五十万ドルになる。

スタッフの人件費や体育館の賃料、機材の償却費。それに加えて、小役人や末端の警官への鼻薬を加えても、出費は高が知れている。格闘技やショーの公演で大きな部分を占めるのは出場者のギャラだが、これは観客からのチップで充当していて、興行主から支払われるのは、『成人男性』に対しては、わずかに五百ドル。その他の対戦者でも一千ドルに過ぎない。

第一試合まで、あと十五分。リング上では、コーナーポストに立てられたポールを使って四人の全裸の娘が煽情的なポールダンスを披露している。むしろ、こういった余興へのギャラのほうが大きい。

「退屈そうだな」

革張りのベンチシートの端に座っている詩織の腰に手をかけて引き寄せて、ドンが口説くでもなく腿を撫でた。

逆らわずに、詩織はドンにしなだれかかる。調査員の役どころではないが、営業の一環ではある。

「観客の皆さんも、ずいぶんと退屈そうですわ」

詩織は意識して膝と膝との間に隙間を作ったが、手は腿の内側までは侵入してこなかった。案外とドンは、女体へのタッチが礼儀と心得ているだけなのかもしれない。

ポールダンスの四人が、一斉にジャンプしてリングに降り立ち、四方へ向かって一揖してから退場した。ポールが片付けられて。

四方の壁面と天井に嵌め込まれた巨大スクリーンが明るくなった。

RYONA FIGHT 15th period

その文字だけが大きく映し出された。

15th period は、隔週で開催される興行の今年十五回目という意味である。

圧倒的な力の差で相手を蹴る闘いは、英語圏では“**domination fight**”と呼ばれるのが一般的だが。日本のヲタクの布教活動(?)のおかげで、RYONAは万国共通語になった感がある。そして。”**domination fight**” “で検索すれば、強い女がマゾ男を圧する画像や動画のほうが多いのだが、” **Ryona fight** “だと逆になる。もっとも、” **non-virtual** “とか検索語に工夫を凝らさないと、ゲームの画像ばかりヒットするのだが。

いや、余談が過ぎた。

ドンが手をはなしたので、詩織は上体を起こした。が、腰は密着させたまま。みずから進んで淫放に振る舞うのは苦手だが、これも仕事のうちと割り切って——みれば、高山社長に強制されているようで、腰の奥に小さな疼きも生じる。

ヘッドセットを装着した男がリングに上がった。赤白の縦縞シャツと、白い星をちりばめた青のズボン。歩く星条旗だった。

場内の照明が薄暗くなって。開け放された出入口にスポットライトが当てられる。

派手なジャズの入場曲とともに姿を現わしたのはクレイジーピッグ・キャサリン、三十五歳。と、プログラムには書いてある。風俗嬢とは違って、公表している年齢やサイズに

嘘偽りはない。もっとも、キャサリンのスリーサイズに興味を持つ観客がどれほどいるかは疑問だが。キャサリンは、真っ赤なワンピースのリングコスチューム。どう見ても、簡単に破れそうもない。年齢も、がっしりした体格も、彼女がヒールだと語っている。

キャサリンがリングに上がると。

ドラムロールが小さく鳴り始めた。十八歳の処女、スザンナがスポットライトの中に立った。二つ名は無しというのも、初々しい。が、リングコスチューム（と言えるかどうか）は凄まじかった。幅の狭い平紐で三角ビキニの輪郭を形作っているだけで、それ以外の布は使われていない。つまり、豊満な乳房も無毛の股間も剥き出しだった。“Peek-a-boo”と呼ばれる水着（？）の一種だ。

リングコスチュームは、基本的には当人の自由に任されている。あまりに露出が少なかりすると、いろいろ『アドバイス』されたりはするが。

こんなに大胆なコスチュームを選んだのは、処女をできるだけ高く売る作戦なのだろうが——処女といえば、清楚とか純潔のイメージが先行する日本人の感覚には合わない。

しかし、彼女は自分の役どころを心得ている。観戦者に向かってのアピールもせず、硬い表情でリングに上がった。

歩く星条旗がアナウンスを始める。この男はリングアナウンサーとレフェリー（そして、ヒールの仲間）を兼ねている。

「第一試合を始めます。三十本一本勝負。ギブアップは認められません。勝負の決着は、どちらかが完全に失神するまで」

その判定は、観客のブーイングとレフェリーの恣意的な判断とにゆだねられている。
「黒のコーナー、クレイジーピッグ・キャサリン。165ポンド、5フィート9インチ。
スリーサイズは、39／28／42」

戦績は、『成人男性』に三戦全敗。少年と女性に五連勝。非合法格闘技の出場者としては、ベテランといえる。

「ピンクのコーナー、バージン・スザンナ。123ポンド、5フィート6インチ。スリー

サイズは、35／23／35」

つぎのピリオドでは使えないリングネームだ。

両者がリング中央で対峙する。スザンナは、腰を落として前かがみの、アマチュアレスリングの構え。対してキャサリンは、仁王立ちで両手を腰に当てて、相手を見下ろしている。

構えの違いと横幅の差で、キャサリンはスザンナの倍ほどにも見えた。

カーンン！

ゴングとともに、スザンナが突進した。相手の左膝を両手でつかんで、投げ上げる。

「え……！？」

詩織の目は、スザンナの正確な動きを追いきれなかった。

一瞬で、スザンナは相手の腹に後ろ向きで馬乗りになって、ふくらはぎを抱きかかえて手前に折り曲げた。相手の両肩は、きれいにマットに着いている。

アマチュアレスリングなら、ピンフォール。いや、プロレスでも一本勝ちだろう。両足で相手の動きを封じているので、フォールの姿勢が五秒ほども続いた。

キャサリンは、フォールから逃れようとはしない。攻めあぐねたスザンナが力を緩めるのを待って上体を起こし、背後から抱き着いた。

脇の下から手をまわしてクロスさせて、スザンナの乳房を握った。

「……………！」

スザンナの顔が苦痛にゆがむ。エロチックだが、女子限定の急所攻撃でもある。グレープフルーツクローと、いちおうの技名もつけられている。

乳房を握りつぶしたまま、キャサリンが立ち上がった。スザンナの爪先が、マットから浮いた。

犠牲者を乳房吊りにして、キャサリンがリングを一周して観客にスザンナの裸身を満遍なく晒した。マネージャーボックスからは、リングを眺めるよりも、壁面のスクリーンのほうが迫力がある。

スザンナは、抵抗を諦めているようにも見える。

自分なら、どうするだろうと——詩織は考えてみた。無駄とわかっている、観客を愉しませて自分も被虐を深めるために、あれこれもがいてみるだろうか。それとも、次の責めをおとなしく待ただろうか。

これだけ体格とパワーの差があれば、どうせ最後にはコテンパンのズタボロにされるだろうけれど、いっそうの厳しい仕返しを覚悟で、どこかで反撃を試みる。一方的に甚振られるだけでは、自分も観客も面白くない。

キャサリンが片手を背後からスザンナの股間に入れて、水平に高く持ち上げた。身体を沈めながら片膝を突いて、そのうえにスザンナを投げ落とした。

「がはあっ……！」

腰骨を強打して、スザンナがマットに転がった。マウスピースは禁じられているので、悲鳴は鮮明だった。

すかさず、キャサリンが宙に飛んで後ろ向きでスザンナの腹に尻を落とした。のを、スザンナが拳を突き上げて迎え撃った。拳が股間にめり込む。

「ぐおおっ……！」

キャサリンが股間を押さえて、マットに両膝を突いた。スザンナが立ち上がって、反撃に転じた。脇腹を立て続けに蹴り、身体を倒しながらエルボーを背中に打ち込む。

しかし、相手を傷つけるのを恐れて、攻撃は委縮していた。キックにしても、当たった瞬間に力を抜いている。アマチュアレスリングでは地方の公式大会で優勝した経験もあるが、相手を斃す目的で闘うのは、これが初めてなのだろう。

キャサリンには、そんな遠慮など微塵もなかった。再びスザンナが中途半端な蹴りを入れてきたとき、逃げるのではなく、そちらへ倒れ込むようにして足を脇に抱え込んだ。がっちりと締めつけて立ち上がる。

仕返しとばかりに、開脚させた中心に、体重を乗せたキックを打ち込んだ。つま先が股間にめり込むのが、はっきりと見えた。

「きひいいっ……！」

股間を押さえた手を、キャサリンが踏みにじる。

観客から激しいブーイングが湧き起こった。

「バージンは大切にしていられ！」

「バージンは、一万ドル以上の値打ちだぞ」

コーナーに下がってキャットファイトを見物していたレフェリーが、両手を上げた。

「お客様に注意致します。会場では、金銭に関する会話はご遠慮ください」

観客同士の裏取引や事前の相場形成は御法度なのだ。

ブーイングを耳にして、詩織はこの観客の異常さに気づいた。これまでは、実に紳士的というか、固唾を飲んでというか、日本人よりもおとなしく観戦していたのだ。

観客にとって、この程度の試合はむしろ退屈なのかとも思ったが、それならそれで、不満のブーイングが湧き起こるだろう。

もしかすると、観客同士に『顔見知り』が多いのかもしれない——と、詩織は思い至った。わざと片田舎を選んで隔週に開催して、常に八割以上の入りということだが、派手な宣伝を打てる興行ではない。熱心な『追っかけ』も少なくないのではなかろうか。ビジネス社会での百万ドルの商談の相手と顔を合わせて、挨拶は御法度なのだが——同好の士として親近感を抱くか、同病相憐れむ気分になるか、微妙なところだ。

もしも詩織が、日本の昭和時代の風俗に通暁していたら、この観客とストリップ劇場の観客とのあいだに、いくつもの類似点を見い出していたかもしれない。

ブーイングを受けて、キャサリンは戦法を変えた。急所を打たれて悶えている犠牲者を強引に立たせて、抱え上げて、膝の上に投げ落とす。

腰を二度も強打して、スザンナはまともに立ってられない状態に追い込まれた。あとは、キャサリンの一方的な攻撃に終始した。バックドロップ、ブレーンバスターといったプロレスの投げ技を中心に、徹底的に痛めつける。

そして。リングロープをクロスさせて、スザンナの両腕を磔けた。腰を持ち上げて半回

転させて、リングの外に吊るす。さらに、キャサリンは自分のリングシューズを脱いで、そのやたらと太い靴紐で足首を縛って、左右に広げた手につないだ。これでスザンナは大文字の“H”を横に倒した形で身動きできなくなった。

スザンナは自力では脱出不可能。しかしもちろん、試合は続く。

レフェリーがリングから降りて、スザンナの正面にしゃがんだ。

天井のスクリーンがリングの俯瞰から、股間のアップに切り替わった。ビキニ水着の輪郭だけをまとった無毛の股間は無惨に開いて、小淫唇の奥まで、ヘッドセットのカメラに捉えられている。

「さあ、ショータイムだよ」

キャサリンが背後からスザンナに抱きついて、これまでとは打って変わって繊細な手つきで乳房を揉み始めた。

最初は無反応だったが、投げ技で受けたダメージから回復するにつれて、スザンナの唇からなまめかしい喘ぎがこぼれ始める。

「あ……んんん……」

対戦相手の意図を悟って、スザンナはむしろほっとした表情。大勢の男の目に恥部を晒し、性的な反応まで見せつけるのは処女（でなくても）には耐えがたい恥辱だろうが、一方的に痛めつけられるよりはましだと思っているのかもしれない。

キャサリンの指が、いっそう激しく優しく蠢く。四本の指で乳房全体を揉みながら、人差し指で乳首を転がす。その刺激で、スザンナの乳首が固く尖っていく。

「あああああ……」

スザンナは喘ぐだけで、言葉は発しない。キャサリンも無言で責め続ける。

「時間稼ぎはもういいから、さっさとフィニッシュしてしまえ」

「ただし指は挿れるなよ」

「その牝犬に天国を味わわせてやれ」

「地獄もだぞ」

野次に应えて、キャサリンの右手が無毛の股間まで滑り下りた。濃いピンクサーモンの淫裂に中指全体を埋め込むようにして上下にこすり、残る指で淫埠を搔き笔った。

「おお、おおおう……」

乳首への責めではまだ残っていた慎ましきもかなぐり捨てて、スザンナが大声で叫ぶ。

キャサリンの指が、すでに勃起しているクリトリスをほじくり出して、そこに責めを集
中する。親指と中指で包皮をしごき、人差し指で先端をタップする。

「おおお……す、すごい……来ちゃううう」

スザンナが初めて発した言葉は、絶頂の予告だった。

キャサリンが左右の手を入れ替えて、右の乳房とクリトリスとを刺激する。

「うああああ……来ちゃう。見られてる……羞ずかしい……」

しかし、スザンナは絶頂に達せなかった。

「ぎひひひっ……！」

大きく開けた口から、悲鳴が迸った。

キャサリンの指は、乳首とクリトリスをしたたかにつねっていた。だけでなく、爪を食い
込ませながら、ぎりぎりといねる。

「このまま、ねじ切ってやろうか。男にとっちゃ、穴と膜さえ無事なら、あとは知ったこ
っちゃないんだから」

対戦相手にではなく、観客への挑発だった。

アリーナが揺れるほどのブーイングが答えだった。

「チッ……可愛い子には優し過ぎるんだから」

「おまえには優しくなんか、してやらんぞ」

「競り落としたら、リング上でスザンナを虐めた三倍を、おまえに返してやるぞ」

「へっ。そいつは、楽しみだね」

野次を飛ばした男に、クレイジーピッグをぶちのめす腕力と技量があるようには見えな
いが、もちろん、トッププライズ・オファラーの意向には逆らえない。それに。この女は

過去の試合後の特権デートでは、何度もマゾ女の役を務めさせられて、それなりに悦虐の味も覚えている。

キャサリンはしかし、スザンナを痛めつけるのはやめて、また性感責めに戻った。今回は最後まで追いつける。

スザンナも。絶頂直前の激痛で転げ落ちたからこそ、一転しての愛撫に、より以上の快感を得てしまう。

「おおおお……来る！ 見ないで……羞ずかしい……」

拘束されていない腰を激しく上下左右に揺するが、それも愛撫への刺激を強める結果にしかない——とは、当人もわかっているのだろう。ますます激しく腰を振り立てて、絶頂に達した。

「来る来る来る……プッシーが爆発する！ うがああああっ……！」

十八歳の処女とは思えぬ獣じみた咆哮とともに、スザンナはのけぞって、全身を硬直させた。そして、がくっと頭を落とした。

しかし、キャサリンの攻撃は終わらない。

「まだまだ。あと十分は残ってる。何回いけるかねえ？」

試合のルールでは、勝敗を決するのは完全な失神だけということになっているが。スザンナの状態は、ほぼそれに近い。しかし、レフェリーは性器責めの実況中継をやめないし、観客もスザンナがさらに快感地獄にのたうつ様を見守るだけ。

観客はドレスコードを守って、ラフな格好をしている。半袖シャツやTシャツ。脛を剥き出しにしている男も少なくない。しかし、その恰好にふさわしい地位に属している者は一人としていない。たとえば、向かい側のVIPルームにいる男は、CNNニュースにもしばしば登場する——そこから先を、詩織は考えないようにした。考えれば、それが表情に表われるかもしれない。詩織の腰を抱き、右脚を自分の膝の上に乗せて、ノーパンの股間をおざなりにつづいている男にそれを気づかれると、ビジネスの話に影響が生じるかもしれない。

ノーパンなのは、詩織ひとりではない。

会場には女の姿も散見される。男と並んでシートに座っている者もいるが、犬のように床に座っている明白な牝奴隷もいた。逆に、ボディガードを兼ねた下僕らしい男を従えた女の姿も、これはわずかに三人。この女主人も含めて、外を歩けば悪徳警官にパトカーの中へ連れ込まれかねない服装をしている。そして、全員が一切の下着を身に着けていないのは——ドレスコードが、そうなっているからだ。もちろん、ディルド付き貞操帯とかロープは下着ではないとみなされている。

カンカンカンカン、カンカンカンカン！

ゴングが試合終了を告げた。

ドン・ガストーニの指が、詩織の股間から引き抜かれた。

リングの上では、クレイジーピッグ・キャサリンが片手を突き上げて勝利のポーズをとっている。レフェリーと二人のスタッフが、スザンナを磔から解放して、リングに放り込んだ。スザンナは、仰向けに横たわったまま動かない。格闘試合で消耗し尽くしたというより、性的愉悦の余韻を味わっている表情だ。

観客が一斉にうつむいて、スマホの操作を始めた。個人所有のスマホは預けて、替わりに貸し与えられたものだ。通常の機能は大きく制限されている。

レフェリーがヘッドセットをはずして、大仰なマイクを手にした。

「集計の結果が出ました。皆さま、スクリーンをご覧ください」

四面のスクリーンには、上のほうに二人の対戦者の名前だけが表示されている。

「勝者、クレイジーピッグ・キャサリンへの賞金です」

名前の下に“\$ 12, 800”と金額が浮かび上がった。観客からのチップの総額だ。

「そして、トッププライズは」

下段に“\$ 3, 600”が表示された。

キャサリンが両手を上げてガッツポーズをした。金額に喜んでいるのではない。賞金を受け取るという意思表示だ。

観客による賞金（チップ）は、複雑なシステムになっている。観客は必ず一方の対戦者にチップを与えなければならない。最低額は20ドル。上限は無い。ただし、20ドルを超えた金額のすべてを支払うのは、最高額をオファーした者だけで、他の観客は20ドルを超えた額の10パーセントしか支払わなくてよい。たとえば500ドルをオファーしても、実際に支払うのは68ドル（ $\$20 + \$480 \times 10\%$ ）ということになる。この10パーセントは、興行側と対戦者とで折半される。

そして、最高額の提示者（トッププライズ・オファラー）は全額を支払うかわりに、その出場者を今夜から二週間以内の丸一日だけ、自由にできる。

自由にとはいっても、処女膜の破損は別として、回復不能なダメージを与えることは許されていない。規約に違反した場合は、この国の損害賠償訴訟で認められるだろう額の十倍以上が課せられる。同一人が違反を繰り返したり、まして殺人に至ったりしたときには——組織の手で“execute”される。違反者の最終的かつ完全な『処理』である。

つまり、この組織の手で開催される興行では、出場者は最低限の安全だけは保障されているともいえる。

新興組織などは、ときとしてスナッフ・ファイトなどを催して（さすがに短時日で摘発されるが）いるのだから、あちらを暗黒ファイトとするなら、こちらはせいぜい裏ファイトでしかない。だからこそ、全米各地で月に二度の興行を過去三十年以上にわたって続けられてきたのだ。

ツアー参加者の安全を最優先するSMツアー社としては、このあたりがぎりぎりの限界だった。

「では、破れたバージン・スザンナへの賞金です」

スクリーンに“\$35,300”の数字が現われた。その下には“\$20,000”。

観客のあいだから嘆声と、わずかな笑いが漏れた。というのも。オファーのうち出場者の手取りは90パーセントだから、提示額は\$22,222だったことになる。

リングサイドのS席で初老の男が立ち上がって、片手を上げて周囲に挨拶をしてから、

スザンナを見詰める。

スザンナがよろよろと立ち上がって、男に向かって両手を広げた。

ルールどおりに完全に失神した敗者には、意思表示の機会が与えられないわけだが。これまで賞金を拒んだ『成人男性以外』の出場者はひとりもない。主人あるいは飼い主の命令で、ただぶちのめされるためだけにリングに上がった女も過去に何人かいたが、そういった場合はプログラムに『賞金無用』と最初から書いてある。

それにしても。処女の値段として考えても、二万ドルはけっして高くない（と考える者しか、ここにはいない）。そのうえ、変態的なプレイにつき合わされるのだから、ただ金だけが欲しくて出場する者は、せいぜい半数くらいだ。また、そういった者は、一度きりの対戦で『引退』してしまう。

「VIPたちは食指を動かさなかったようだな」

ドンがタブレットを眺めて、詩織に向かってつぶやいた。

レスリングの心得がすこしはある、健康的で肉感的な処女あたりでは、筋金入りの変態の眼鏡にはかなわないらしい。

リングが簡単に清掃されて、幕間つなぎの芸人が登場する。全裸の二十代後半の女。ボーリングのピンを四本使って——高く投げ上げて、マングリ返しの姿勢で受け止めたりするが、熱心に見物する客はすくない。

十五分の休憩が終わって、第二試合が始まる。

対戦カードは、白人の金髪美少年と黒人のマッチョガール。美少年は、サッカー当たりの区分でなら●●5といったところか。股間だけを包んで尻を丸出しにしたサポーター、いわゆるジョックストラップだけを身に着けている。グローブもリングシューズも無し。

対する黒人女もビキニショーツ一枚の半裸だが、股間が異様に盛り上がっている。しかし、純粹の女だとプログラムには明記されている。

リングアナの選手紹介。

「黒のコーナー、ブラックマッスル・ボニータ。175ポンド、6フィートジャスト。スリーサイズは、38／29／41」

ボディビルで鍛えた筋肉は、そんじょそこらの男より、ずっと逞しい。

「ピンクのコーナー、JCボーイ。5フィート5インチ、133ポンド。コックサイズは勃起時で1インチ1／2×5インチ1／8」

直径3.8cm×13cm。白人としては小さいほうだと、詩織は思った。ただし、『成人男性』と同じくらいにフニャチンかどうかまでは——試合中にわかるだろう。

ゴングと同時に攻勢に出たのは、少年のほうだった。

ファイティングポーズからジャブを繰り出して、ワンツーまで華麗に決めてみせた。

責められるボニータのほうは、顔だけはガードするものの、まったくの無抵抗。蝶のように舞う少年のパンチを、蜂に刺されたほどにも感じていないようだった。

それは、対戦している少年がいちばんわかっている。自分のパンチでは効果がないと判断するや、さらに踏み込んで、膝で女の股間を蹴り上げた。

相手を痛めつけることが目的の試合に、ルールはない。ただし、『成人男性』の側から顔面攻撃を仕掛けることはまず無いし、犠牲者に擬せられている側も報復を恐れて、目潰しや急所攻撃などは控える——というのが、暗黙のルールというより、自衛手段となっている。

少年が仕掛けた攻撃は、相手が女性だから微妙なところだが。

「ぐぶっ……」

ボニータは、意外とダメージを受けたらしく、両手で股間を押さえて、マットに膝を突いた。

ここぞとばかりに、少年は肘を首筋に叩き込んだが、これは少年の側がむしろ肘を痛めた感じだった。

立ち上がりかけるボニータに、少年がキックをいれる。反撃を恐れてか、斜め後ろからの攻撃になっている。この部位への攻撃は腎臓を直撃するので、ボクシングではプロでも

反則とされている。

少年の攻撃を受けながら立ち上がったボニータは、さすがにファイティングポーズをとって、急所への攻撃から身を守っている。が、自分からはパンチを出さず組み付きもせず、それこそ専守防衛に徹していた。

会場からブーイングが湧いたが、ボニータは無視している。少年のほうが、むきになっていっそうの攻勢に出る。

「五分経過」

なまめかしい場内アナウンスだが、これはA I の合成音。

少年の攻撃が続かなくなった。一ラウンドの三分を越えて、肩で息をしている。

ぬおおっといった感じで、ボニータが少年の前に立ちはだかった。

じゅうぶんに踏み込んで、右ストレートを少年の顔に向けて放つ——と見せかけて、がら空きになった腹へ左フックを叩き込んだ。単純なフェイントだったが、同じ体重の者同士が闘うアマチュアボクシングしか知らない少年は、ボニータの体格そのものに判断を狂わされて、間合いを見誤っていた。

肝臓を打たれて、少年は苦悶に顔をゆがめながらマットに沈んだ。

ボニータが馬乗りになって、キャメルクラッチを決めた。腰より上に尻を落として、片腕で喉を締めつけ、もう一方の手は脇の下から上体を折り曲げる。

少年は呻き声を漏らすことすら許されず、顔が紅潮していく。

悶絶する前に、ボニータは少年を開放した。朦朧となっている少年の腰に手をかけて、ジョックストラップを引きずり下ろした。すっかり委縮したペニスが、観客の目に晒される。

レフェリーはコーナーポストに寄り掛かったまま。醜悪な場面をクローズアップする気は無いらしい。

ボニータは少年の両脚をつかんで反対向きに寝そべり、片足を股間に押しつけた。

「おらおらおらあああっ……！」

ぐりぐりと股間を踏みにじる。羞恥攻撃ではなく、本気でダメージを与えにいつている。

「や、やめろ……」

ようやく声を出せるまでに回復した少年だったが、股間への攻撃で、また悶絶寸前になる。

ところが、性力を持て余している少年は、物理的な刺激で勃起させてしまった。

それをボニータが見逃すはずもない。

「へっ……いっちゃまえに色気づきやがって。お姉さんが可愛がってやろうかねえ」

体勢を入れ替えて、少年の股間にむしゃぶりついた。まったくためらわず、勃起したペニスを頬張って、髪を振り乱してピストン運動を始めた。

「あ、あああっ……」

せいぜい二十秒かそこらで、少年は射精した。それを飲み下して、ボニータが立ち上がった。

試合が始まって、まだ十分と経っていない。これからどうするつもりなのだろうと、詩織は要らない心配をしたのだが。

ボニータがビキニショーツを脱ぐと、観客からどよめきの声があがった。彼女の股間からは、少年の倍もありそうな逸物が垂れていたのだ。

ボニータが無雑作にペニスを抜き取って、レフェリーに見せつけた。スクリーンにF字形の物体が大写しになった。ボニータの股間に生えていたのは、リアルな形状とアンリアルな大きさをしたディルドだったのだ。F字形の短辺ふたつは、太くて短いディルドと、細長いアナルビーズになっている。こんな代物を股間に埋め込んでいたら、蹴られたときに男性並みのダメージを受けたのも当然だった。L字形の交点からは淫囊そっくりの袋が垂れている。

ボニータは短い二本を自分に挿入し直して、淫囊にしか見えない肌色の袋を握った。垂れていたペニスが、サイズはそのまま急角度に屹立した。

肉体のダメージからじゅうぶんに回復していないうえに射精直後の虚脱に陥っている少

年を、ボニータがマングリ返しの形に押さえ込んだ。そして、疑似ペニスを少年の口に押しつける。

「痛い目に遭いたくなかったら、しっかり濡らすんだよ」

レフェリーが大仰に肩をすくめて、二人の横にひざまずいた。まさに疑似フェラチオを強制されようとしている少年の顔が大写しになった。

少年は事態を悟って、大女から逃れようとする。が、ただのマングリ返しではなく関節技を掛けられているので、無駄なあがきに過ぎない。しかし、自分を陵辱する道具を口に受け挿れようとはしない。

「へっ。痛いのが好きなのかい」

ボニータが姿勢を変えて、少年のアヌスにディルドの先端を押し当てた。疑似淫嚢にはローションも仕込まれているのだろう。すでに濡れて、先端はフラッドライトの光を妖しく照り返している。そうしてみれば、ボニータがフェラチオを求めたのは、ただ少年に屈辱を与えることだけが目的だったわけだ。

「ふふ。覚悟はできてるようね」

少年だけに向けて放たれた言葉だったが、レフェリーのマイクがしっかり拾っている。

大写しのスクリーンの中で、少年のアヌスがディルドに押されて、内側へくぼむ。

「痛い……厭だ……赦して……」

少年の訴えは、どこか芝居がかっていた。観客の耳を意識しているのかもしれない。もともと。とことん強気に振る舞うのと、女々しく振る舞うのと、どちらが対戦相手とセンサーである観客とに有利にはたらくかは、詩織にも予想はつかなかった。

ボニータが、ぐっと腰を進める。陥没しているアヌスに、直径二インチを超えるディルドがめり込んでいく。

「ぶぎゃああっ……！ 痛い！」

今度は、混じりっ気なしの悲鳴だった。

ボニータが腰を大きく動かす。少年の尻に自分の下腹部が突き当たるまで腰を進め、引

くときはディルドを抜去してしまう。少年は、アヌスをこじ開けられる激痛を何度も味わわされた。ディルドの付け根も、ボニータの股間に入出入りする。もちろん、それは彼女にとって苦痛ではなく、肉体的な快樂だった。そして、少年の悲鳴が彼女の愉悦だった。

抽挿を繰り返しながら、ボニータは片手でペニスを握った。少年の意志に（多分）反して、ペニスが勃起する。

「そうら、いっちゃいなよ」

抽挿に合わせて手を動かす。

前立腺への刺激も効いているのだろう。少年はアヌスを貫かれる劇痛の中で、二度目の射精を迸らせた。それをボニータが手の平で受け止めて、少年の口に押し当てた。

「ちゃんと舐め取るまで、手はどかさないよ」

鼻までふさがれて、少年は恥辱にまみれて、おのれの精液を舐めるしかなかった。

「二十分経過」

ボニータが立ち上がった。自分もディルドを抜き取り、コーナーポストの下において。

「さあ、ラストスパートだよ！」

強引に少年を立たせると、男性プロレスラー顔負けの大技で、少年をリングに投げつけた。自分の身体をクッションにするような配慮はせず、それどころか、マットに叩きつけるまで手をはなさず、受け身も取れないようにしている。

二度三度四度と投げられて、少年はほとんど失神している。それでも、ボニータは少年を引きずり起こしては投げ落とす。

カンカンカンカン、カンカンカンカン！

ゴングに命を救われたと詩織が感じたほどに、少年は徹底的に痛めつけられていた。

少年は担架で搬出された。

リングの上には、勝者のブラックマッスル・ボニータひとり。

スクリーンに賞金額が表示された。総額は\$ 6, 8 2 5。トッププライズも、わずかに\$ 1, 7 5 5。自分の『安値』には慣れているのだろう。淡々と片手を上げた。

J Cボーイへの賞金は\$ 12, 800で、トッププライズは\$ 2, 880。総額の割にトッププライズが低いのは——高額で少年を買おうという客はいなかったが、二千ドルか三千ドルならいろいろと甚振ってみたい、自分の牝奴隷と絡ませてみたいと考えた客が多数いたことを意味している。

「退屈そうだな」

ドンが、また詩織の股間に指を挿れて、濡れ具合をたしかめた。

「本場のミックスマッチですから、どんなに凄まじいのかと期待していたら、案外とおとなしいですね」

ふふんと、ドンが小さく嗤った。クリトリスを探り当て、これもマゾ女へのサービスといった感じで、軽くつねった。

「あ……んんん」

詩織の呻き声も、お義理といった感じだった。

「ここまでは前座試合だ。後半の二試合は、こんなものではないぞ」

後半戦までの休憩時間は三十分。十人ほどのバニーガールが、ワゴンを押して通路を行き来している。彼女たちはバニーガールの小道具だけを身に着けて、レオタードは着ていない。尻尾はアナルプラグで留めてある。

館内での飲食はすべて無料だが、バニーたちのガーターベルトには、何十枚もの紙幣が挟まれている。だから彼女たちは、乳を揉まれようが指を挿れられようが、笑顔を絶やさない。

リング上にはシートが敷かれて、ひとりの女が三人の男に騎られているが、ポールダンスやジャグリングと同じくらいにしか、観客の注目を浴びていない。

淫美だけれど官能的に過ぎるといのが、詩織の感想だった。女が陵辱されているのではなく男を堪能しているようにしか見えない。

試合開始の五分前に、男が一斉に射精して、女は精液まみれのまま退場した。

そして、退廃的なBGMが消されて。

「黒のコーナー、SS・スパナー」

星条旗をデザインしたタイトの巨漢は、失笑で迎えられた。リングネームが“Star Spangled Banner”のもじりだと、ひと目でわかるコスチュームだった。これが東洋の某国で、タイトが光芒を引く太陽をデザインしたものだったら、そして犠牲者が乳房を剥き出しにして胸元まである裳裾でも穿いていたら、怒号が湧くか拍手が湧くか、いずれにしても危うい雰囲気になるところだが。お国柄というか。むしろ、失笑も控えめで——白人ヒーローが悪役インディアンを懲らしめるという暗黙の設定に、サディズムを超えた興奮がうかがえた。

なぜ、スパナーはこのコスチュームを選んだのかと、詩織は疑問を抱いた。もしかすると、レフェリーも仲間だと、観客にアピールする意図があるのかもしれない。

「ピンクのコーナー、ソルジャーピンク」

革のフンドシだけを身にまとい、顔にも胸にも戦化粧を施した赤銅色の肌の少女が、右手に握った棍棒を突き上げた。

「117ポンド、5フィート3インチ。スリーサイズは、32／23／33」

プロフィールには個人の事情までは記されていないが、経済的な事情で出場したのだろう。浅黒い顔が、緊張にひきつっている。

試合は、これも、やられ役の先制攻撃という形で始まった。

棍棒を握った右手を振りかざして腰を落とし、ピンクが左半身に構える。これがトマホークなら絵にはなるが、さすがに格闘技ではなくなる。

「ハワワアアアアーッ！」

雌叫びとともに突進して、棍棒を首筋目がけて振り下ろした。

試合後に『買われて』なにがしかの辱めを受けるのは覚悟していても、衆人環視のリング上で捌られるのは御免だという気迫が、見ている者にも伝わってくる渾身の一撃だった。

スパナーは意外と素早い動きで身を沈めて棍棒をかわし、タックルでピンクを押し倒し

た。これまでのヒールのように、ベビーフェースに花を持たせようなどとは考えていないらしい。

体重差で押さえ込んで、革フンドシを強引に引き剥がす。少女の手を背中へねじ上げて、その革フンドシで手首を縛ってしまった。

これでは、もはや格闘技ではない。一方的なリンチの幕開けだ。

「卑怯者！ 手をほどけ。僕が恐いのか！？」

少女に罵られても、スパナは嘲笑うだけ。少女の背中に尻を落として、マットに落ちている棍棒を拾い上げてから、片手で両脚を抱えてサバ折りを決めた。棍棒を少女の股間に擬して、観客を見回す。

ほとんどの観客が右手を突き出して、親指を下に向けた。

「やっちまえ」

「ぶち抜いてやれ」

「突っ込め！」

スパナは棍棒を無雑作に押し込んだ。

「ぎゃぐわあああああつ……！！」

スザンナの性的絶頂の咆哮とは真逆の、激痛と屈辱と怒りとに満ちた怒号が、少女の喉から迸った。

「おら、立てよ。まだ五分と過ぎちゃいない。あと二十五分、たっぷり可愛がってやるぜ」

少女の三つ編みのお下げをつかんで強引に立たせると、ロープへ後ろ向きに投げ飛ばす。

少女はロープに跳ね返されて、足をもつらせて倒れかけた。その無防備な腹へ、スパナがソバット（後ろ蹴り）を叩き込んだ。

「ぐっ……！」

息を詰まらせて、またロープへ蹴り飛ばされ、そのままずるずるとマットに沈み込む少女。

「ぎひい……！」

尻餅をつきかけて棍棒の端がマットに突き当たり、股間をえぐりあげられる。

ゆっくりと、少女が顔面からマットに倒れ込んだ。少女の股間から流れた血が、白いマットを赤く染めた。

スパナーはさらに棍棒を蹴り込んで少女に断末魔の悲鳴をあげさせてから、また髪をつかんで強引に立たせた。いや、お下げで宙吊りにした。

「まだお寝んねは早いぜ」

剥き出しの腹にパンチを打ち込む。じゅうぶんに手加減して、当てると同時に腕を引いているが、それでも一発ごとに少女の顔が苦悶に上塗りされる。

スパナーは少女をリングに投げ捨てて、タイツを膝までずらした。

その瞬間。少女が跳ね起きて、スパナーの股間めがけて頭から突っ込んでいった。先祖の闘志を彷彿とさせるような反撃だったが、届かなかった。少女は、スパナーの手前で足をもつらせて、うつ伏せに倒れ込んだ。

リングに目を奪われていた詩織は、視界の隅で白いものが動いたのに気づいた。斜め向かいのVIPルームだった。

そちらへ目をやると——リング上のソルジャーピンクと同じくらいの年頃の少女が、手すりをつかんで身を乗り出していた。ノースリーブのサマーワンピースのような薄物を着て、肌が透けているが、乳房のあたりはレースで隠されている。

（ずいぶんと若い性奴隷ね）というのが、詩織の第一印象だった。こんな場所に、普通の娘がいるはずがない。まさか、あの年齢でサディスチンということもあるまい。ならば、性奴隷にせよ情婦にせよ、そういった類の娘だとしか考えられない。

詩織は、VIPルームの本来の購入者らしい人物にも不審を感じた。ほっそりとした銀髪の老人。七十台か、もしかすると八十に手が届いているか。しかも、座っている椅子はVIPルームの一人用ソファではなかった。薄い背もたれの両端から後方へハンドルが突き出ている。腰から下は壁に遮られて詩織からは見えないが、車椅子だろう。人生の残り火を掻き立てるべく、若過ぎる愛人を伴って嗜虐の場へ身を運んだ——そんなシナリオ

が、詩織の脳裡に広がって。ソルジャーピンクの瀕死の絶叫に掻き消された。

少女は後ろ向きに腰を抱かれて宙吊りにされて、女淫に棍棒を突っ込まれたまま、スパナーの肉棒にアヌスを犯されていた。

「ぎゃあああっ……痛い痛い！　お願い……もう赦して！」

スパナーは、あっさりと少女を赦した。のではなく、さっさと射精して、少女をマットに投げ捨てた。棍棒がさらに膣奥をえぐって、少女から最後の絶叫を引き出す。

レフェリーが両手を頭上でクロスさせた。

カンカンカンカン、カンカンカンカン！

「テクニカル・ブラックアウトにより、SS・スパナーの勝利です。ブラックアウトタイム、12分20秒」

なるほどと、詩織が苦笑した。レフェリーストップによる勝利をテクニカル・ノックアウトと称するが、この場合はブラックアウトのほうが当を得ている。ルールの説明では失神を“unconscious”などと気取っているから、語感の落差が臨場感を生み出している。

ソルジャーピンクも担架で搬出された。

「会場の皆様にあらかじめお断わりしておきます。ソルジャーピンクへのトッププライズ・オファラーに与えられるプライベートタイムは、期日を延長させていただく場合もあります。その点を御承知のうえで、オファーをお願いします」

道具が使い物にならなければデートの意味がないのだから、当然といえば当然だった。もっとも。普通の意味で道具を使うか、治ったばかりの道具をまた壊すかは、トッププライズ・オファラーの自由だが。

金額を訂正する者はほとんどなく、すぐに集計がまとまった。

ソルジャーピンクの賞金は\$30,490。最高額は\$12,510。ソルジャーピンクのプロフィールでは処女となっているが、棍棒を突っ込まれた時点で、その価値がなくなっている——かどうかは、判断が分かれるかもしれない。バイブでオナニーをしているが、ペニスを挿入されたことはないから処女だと言い張る強者だっているのだから。